令和４年度
研修実施報告書
（簡易版）

国立保健医療科学院
専門課程Ⅲ
地域保健臨床研修専攻科

ご挨拶

国立保健医療科学院専門課程Ⅲ地域保健臨床研修専攻科は、2 年目研修医を対象として、幅広い公衆衛生の知識と技術を身につけることを目的として発足した研修プログラムです。平成 17 年度の試行を経て、平成 18 年度から開始いたしました。平成 20 年度から専門課程の中に、「地域保健臨床研修専攻科」として正式に位置づけられています。平成 22 年度までは 3 か月のコースでしたが、平成 23 年度以降は毎年 10～11 月の 2 か月の研修を行ってきました。現在、31 の病院と連携し、研修プログラムを実施しております。

令和4年度は、全国の 10 病院から 13 人の研修医を迎え入れ、10 月 1 日から 11 月 30 日まで研修を実施いたしました。新型コロナウイルスの感染動向を見つつ、院内対面研修、現地研修、オンライン研修を組み合わせた、計 45 テーマの院内での講義・演習・セミナーのほか、厚生労働省、千葉県への訪問・研修の機会を得られました。また、今年度は 3 年ぶりに海外研修が再開され、フィリピン大学のご協力のもと、マニラ周辺の保健衛生施設での研修や、WHO 西太平洋地域事務局での講義を受けることができました。本研修にご協力いただいた多くの皆様のお陰様で、13 名全員が無事に研修を終了しました。ご多忙のところ講義を行ってくださった先生方、研修生の受け入れにご尽力いただいた関係者の皆様に心から感謝申し上げます。

平成 18 年の正式発足以降の修了生は、153 人に達しました。卒業生が当専攻科の講師で来られたり、研修先で卒業生にお世話になったりする機会も徐々に増えております。公衆衛生医師の確保の重要性は、殊に昨今の新型コロナウイルスに係る健康危機管理対応でも、明らかになっております。今後の更なる研修プログラムの充実と発展に向けて、ご指導、ご鞭撻を賜れますと幸甚です。

令和 4 年 12 月

地域保健臨床研修専攻科　研修担当一同

専攻科責任者　国際協力研究部　町田　宗仁
専攻科担当者　国際協力研究部　大澤　絵里
生活環境研究部　金　　勲
生活環境研究部　三浦　尚之
健康危機管理研究部　竹田　飛鳥
保健医療経済評価研究センター　此村　恵子

令和4年度研修のねらい

研修の目的としては、将来、保健所勤務等、公衆衛生分野のキャリアを目指す医師を育成することであり、今後研修生が公衆衛生分野での仕事を志すにあたって、第一に、様々なレベル（グローバル、リージョナル、国、地方自治体）の公衆衛生活動を見渡すこととした。第二に、公衆衛生実務にどのような職種が関係し、多数の専門職種が働く中で、医師が公衆衛生に関わる意義と求められる役割を知ることとし、研修内容を構成した。これらの目的を達成することで、研修生が今後医師として公衆衛生キャリアパスを形成する一助となる研修となることを目指した。なお研修プログラムは、添付資料 1のとおりである。

研修概要

院内講義・演習・セミナー（添付資料 1）

院内では、41 名（院内 22 名、院外 18 名）より、51 テーマの講義・演習を実施した。演習形式を多く取り入れ、また、オンライン講義も多く実施された。すべての講義に高い評価が得られたが、キャリアパスについても触れられていた講義や、オンライン講義中にチャット機能を多用した pull 型の講義について、特に人気を集める傾向にあった。

院外研修（国内）

➢ 厚生労働省

中央省庁における厚生労働行政の実務を体験するため、10 月 11 日から 14 日にかけて、厚生労働省で 4 日間の実習の機会をいただいた。研修生は、配属課の医系技官を中心とした職員の指導のもと、5 日間インターンとして業務を体験した。研修生からは、「実際の業務の様子がわかり、医系技官の役割が見えてきた」、「公のために働く、という姿が見られたのは良かった」「山積する課題の優先順位付けや調整力の必要性を体感した」、「外から見ていると全く想像もできないくらいの、意思決定に向けての速さや困難さがあった」といった感想が挙げられていた。

➢ 千葉県庁

地方自治体の衛生行政にかかわる医師の役割を知るため、10 月 28 日に千葉県庁を訪問した。今年度は、地域医療構想に関する演習を行った。演習時点での実際の医療圏ごとのデータや計画に基づき、3 グループに分かれて、将来の医療提供体制の在り方について、各グループが検討した今後の体制の提案を発表し、県庁職員との意見交換を行った。部分的ではあるが、計画策定やプレゼンテーションの疑似体験をした。「地域医療構想の具体的な内容を考える機会となった 」、「地域医療構想について、実在する二次医療圏を用いて考えることができて医療構想の難しさを感じることができた」、「地域診断、地域医療計画を立てることを体験することができて、その難しさとともに面白さを実感した」、「様々なステークホルダーが絡み、人間の世界の難しさや面白さを感じた」などの感想が、研修生からは寄せられた。

➢　朝霞浄水場

新型コロナウイルス蔓延のため、当専攻科として 3 年ぶりの浄水場見学が実施できた。10 月 31 日、科学院での水道水の安全な供給に関する講義の後、東京都水道局の朝霞浄水場を訪問した。浄水場担当者からは浄水処理の基本、非常時のバックアップ体制、東京オリンピックを契機としたテロ対策強化などについて説明を受けた。研修生からは、「江戸時代の利根川東遷や玉川上水掘削から続く東京周辺の水道の歴史が今なお進化しながら続いていることに感動を覚えた。」、「これまでの水と健康の関わりについての講義をもとに実際に目にするとより印象的に、われわれの暮らし、生活にとって不可欠なものだと実感することができた」、「設備の規模の大きさに圧倒された。」、「水が手元にくるまでの過程を知ることができて興味深かった」、「講義の後に実際の浄水場に行ったことで、浄水の仕組みが理解しやすかった。実際に働いていらっしゃる職員の方の業務内容などをもっと質問したかった」などの感想が聞かれた。

➢ 国立医薬品食品衛生研究所 （添付資料 2）

11 月 7 日、国立医薬品食品衛生研究所を訪問、所の概要、新型コロナウイルス対策に係る所の役割、医薬品の品質保証、ナビゲーション医療技術、バイオ医薬品の品質評価、再生医療製品の実用化に係る課題、医薬品安全性情報の収集に関する講義と、所内見学の機会を得られた。研修生からは、「設立された経緯、役割について知ることができた。レギュラトリーサイエンスの概念、これからの役割について、より詳しく知りたくなった。」、「医薬品の品質保証は、日本にいると保証されていて当然と思ってしまいます。本当に様々な職種の人が関係して、医療が成り立っている事を理解した。 」、「臨床と研究の協働を近未来的に考えていきたい 」、「バイオ医薬品の品質管理の難しさについて、よくわかった」、「 将来的に iPS から臓器が作れて治療に使えるように

なればかなりの疾患が治癒できるように感じた。基礎研究のインパクトの大きさを改めて実感した。」、「不確実の情報も多い中でどのリソースをどれくらい信頼して方針決定をしていくかは非常に困難である」などの感想が寄せられた。

➢ 国立感染症研究所戸山庁舎、ハンセン病研究センター （添付資料 3）

11 月 8 日、9 日は国立感染症研究所戸山庁舎、10 日は国立感染症研究所ハンセン病研究センターを訪問した。戸山庁舎では、研究所の概要に始まり、感染症危機管理、FETP の活動、感染症の病理学、動物由来感染症、昆虫媒介感染症などについての講義を受け、感染症危機管理センターに新たに設置された緊急時対応センター（EOC）の見学を行った。ハンセン病研究センターでは、薬剤耐性菌対策、抗酸菌感染症の現状などについての講義を受け、国立ハンセン病資料館を見学した。研修生からは「FETP、実地疫学の面白さを感じた」、「感染症危機管理のために、感染症研究所がどう取り組まれてきたのか、システムにおける位置づけを知ることができた 」、「実地疫学において病理学や実験的な手法が重要であることが理解できた。」、「キャリアパスについて考える良い機会となった」、「新興感染症において、どのように疫学でアプローチするのか、実際に行われたことを例に提示いただけてよかった」、「普段は意識をしない種類の感染症について、学ぶことができた」、「AMR の歴史、経緯が学べたのはよかった」などの感想を持った。また、ハンセン病資料館に関しては、「ハンセン病はすでに解決した病気、というイメージが少なからずあったが、実際はそうではない事を理解した」、「感染症と社会との在り方について再度考える機会になった 」などの感想が寄せられた。

フィリピン研修（添付資料 4）

11 月 14 日から 18 日にかけて、フィリピン共和国のマニラ周辺における保健衛生施設での研修を実施した。地方自治体に設置されているヘルスセンター、また町内会単位に近いバランガイに設置されてい

るバランガイヘルスセンター、三次医療施設であるフィリピン総合病院、熱帯医学研究所の見学や、フィリピン大学公衆衛生大学院における寄生虫や熱低地域に特有な感染症に関する講義、WHO 西太平洋地域事務局におけるグローバルヘルスに関する講義を受ける機会があった。研修生からは、「日本では経験することができないような感染症について具体的に学ぶことができた」、「実際に見ることで、フィリピンが抱える問題を意識できた」、「グローバルな枠組みからローカルの保健活動まで凝縮して学ぶことができた」などの感想が寄せられた。

グループ課題報告会

専攻科担当から提示した課題の中から「在宅医療の推進」、「 IT 技術の活用による新たな医療サービス展開」、「新型コロナ対策の是非やあり方 」、「公衆衛生医師の確保・養成 」について、4 グループに分かれて、話し合いのうえそれぞれの課題を設定、院内、院外研修の合間に 3 週間、調査研究を行った。各テーマについて、日本としてどう進むべきか、そのためには、どのような調整を経て行われるのか、国内外の動向の比較をすると日本の立ち位置はどのようなものか、などの視点で、グループごとに発表を行った。「在宅医療の推進」では、日本の政策の現状と課題、ACP の普及策、北欧の福祉政策について、「 IT 技術の活用による新たな医療サービス展開」では、日本で欠けている IT 技術の医療現場への応用について、「新型コロナ対策の是非やあり方 」では、新型コロナ発生以来の対策のレビュー、「公衆衛生医師の確保・養成 」では、公衆衛生医師が何故増えないかということについての分析など、それぞれ発表を行った。

個別課題演習・成果発表会（添付資料 5）

講義や実習を通じて、ある程度、公衆衛生分野に対する視野が広がった研修の半ばで、研修生が個々に関心のある公衆衛生のテーマを選び、専攻科担当の助言を得つつ、約 4 週間の調査研究を行った。発表会では 15 分間のプレゼンテーションと、その後の質疑応答を行った。①発達障害児に対する教育のあり方、②日本と諸外国の母子保健、③小児科入院における付添問題、④行動科学とソーシャルマーケティング、⑤健康に関する意思決定のための情報提供のあり方、⑥ 医療へのフリーアクセスの是非、⑦医療資源の配分に関する倫理的考察、⑧気候変動への取り組み、⑨センテナリアンの現状と Healthy Aging について、⑩医療情報におけるセキュリティについて（Zero Trust Network という概念について）、⑪公衆衛生学と日本の高齢者医療の抱える問題点、⑫地域枠による医師確保対策について、⑬5 医師の偏在対策について、と多岐にわたるテーマに取り組んだ。研修生全員、テーマに対する必要性と現状を把握し、問題点の抽出と課題選定、改善策の提案に至るプロセスがしっかりしていて明快な発表となった。また、海外事例の調査、統計データの収集など情報収集と解析能力も長けており、研修生の将来の活躍が期待される。他国の事例や情報収集では先進国がメインとなりがちであるが、日本の制度を取り入れ、実状に合わせたアレンジで優秀なシステムを構築している途上国の事例もあり、そのような国からも学ぶことは多くあるとの専攻科担当からの助言があった。

テーマの選定から、一つのテーマを掘り下げる視点、プレゼンテーションのスタイルは、13 人それぞれの個性が存分に発揮されていた。活発な質疑応答により深められた討議は、2か月間の研修によって、視野が広がったという成長を感じさせる充実した内容であった。

研修総括(添付資料6)

研修後のアンケートによれば、研修の満足度については、平均で 5 点満点中 4.92 点の評価を得た。また、後輩に研修を勧めたいか、という問いに対しては、全員とも勧めたいと回答し、「研修を受ける前と比較して考え方も変わり、また公衆衛生に興味のある同期の発言などを聞くことでとても刺激になった」、「今までになかった視点を得ることができ、将来の可能性の幅が広がると考えられる」、「主体的に公衆衛生に関わろうとしてきた医学生・研修医でもここまで沢山のことに触れることはなかなか難しいと思うので参加して良かった」といった感想が寄せられた。

研修生に、「後輩にこのコースを勧めるとすれば一言でどのような研修コース、と紹介しますか？キャッチフレーズを提案してください。 」と質問、回答の一部をご紹介する。

- 視野の広がるコース
- パブリック・ヘルス・パルス療法
- 今後のキャリアの可能性が広がる！
- 公衆衛生をいろんな面から学べる！
- パブリックヘルスに特化！日本で一番受けたい、臨床研修
- 自分のいる位置を様々な視点から俯瞰できる 2 か月
- 公衆衛生医師の初期研修コース
- あなたの知らない公衆衛生学を学べる研修
- 響くよ
- 地域保健から国際保健までの公衆衛生
- 医師として、より広く多くの人々に対しての社会貢献を志す者へ！
- 今の医療に疑問を抱いたあなたに。

院内、海外を含めた院外研修を交えながら実施されたこの 2 か月間は、様々な視点から公衆衛生という世界を見聞してもらうことを目指したプログラムであった。アンケート結果を見る限り、研修の狙いは伝わっていたものと考えられる。また総じて、研修生の積極的な参加や、学びの吸収を、研修担当一同が感じたところである。多角的なものの見方を得るとともに、多様なキャリアプランを思い描けるようになることが、この研修の成果である。また、研修生同士で友好を深め、刺激し合う姿が随所で見られた。今後もこの研修で得たネットワークを更に強化し、拡大し、行政に限らず、様々な社会医学、公衆衛生分野で活躍していくことが強く期待される。

今年も、研修生のプログラムへの積極的な参加と、関係者のご尽力により、濃密な日々を過ごし、事故もなく、無事全員が研修を修了できたことに、改めて感謝申し上げたい。

添付資料1　院内講義一覧

院内講師　（講義日順）

テーマ	講師名
「院長講話」	院長　曽根　智史
「健康政策の公共性」	政策技術評価部　武村　真治
「健康日本２１」	生涯健康研究部　横山　徹爾
「健やか親子21と成育基本法」	政策技術評価部　上原　里程
「地域の母子保健活動」	国際協力研究部　大澤　絵里
「地域保健の実践」	
「新型コロナと空調・換気」	生活環境研究部　金　勲
「たばこ対策研究」	生活環境研究部　稲葉　洋平
「メコン流域の水利用と下痢症リスク評価」	生活環境研究部　三浦　尚之
「医療安全：患者家族から伝えたいこと」	国際協力研究部　種田　憲一郎
「チーム医療と医療安全」	
「医療経済」	保健医療経済評価研究センター　福田　敬
「新生児マススクリーニングと医療経済評価」	保健医療経済評価研究センター　此村　恵子
「健康危機管理」	健康危機管理研究部　冨尾　淳
「地域医療構想とレセプトデータ」	医療・福祉サービス部　赤羽　学
「高齢者福祉と地域包括ケアシステム」	医療・福祉サービス部　大夛賀政昭
「保健師とは」	生涯健康研究部　佐藤　美樹
「公衆衛生キャリアの一例」	国際協力研究部　町田　宗仁
「保健所における公衆衛生医師」	
「新型コロナと空調・換気」	生活環境研究部　金　勲
「感染症疫学調査の基本的な分析手法」	健康危機管理研究部　竹田　飛鳥
「電磁波と健康／リスクとは」	生活環境研究部　牛山　明
「水と健康」	生活環境研究部　浅見　真理
「食品衛生の基本」	生活環境研究部　吉冨　真理
「歯科口腔保健」	統括研究官　福田　英輝

院外講師（講義日順）

テーマ	講師名
「我が国の禁煙対策」	産業医科大学　大和　浩
「地域精神保健」	千葉大学　吉村　健佑
「産業精神保健」	
「医療ICT・遠隔医療」	
「医療費の適正化と政策決定の実際」	
「HIV/AIDSコントロールの現場から」	国立国際医療研究センター　田沼　順子
「コロナワクチン接種作戦について」	厚労省障害保健福祉部　林　修一郎
「災害医療」	DMAT事務局　赤星　昴己
「結核の世界戦略」	元WHO　錦織　信幸
「グローバルヘルスへのキャリア」	
「保健所の現場から」	群馬県利根沼田保健福祉事務所　武智　浩之
「薬事行政とレギュラトリーサイエンス」	大阪大学　山岸　義晃
「国際保健・UHC・キャリアパス」	東京女子医科大学　坂元　晴香
「GAVIのワクチン戦略」	GAVI　北島　千佳
「原子爆弾被爆者援護施策について」	厚生労働省健康局　新田　惇一
「コロナ治療薬の臨床研究について」	藤田医科大学　土井　洋平
「大規模データベースを用いた臨床疫学研究」	東京大学　山名　隼人
「身体活動・体力と健康」	早稲田大学　宮地　元彦
「医療ICTの可能性」	芝浦工業大学　市川　学
「公衆衛生行政の醍醐味」	厚生労働省技術参与　正林　督章
「行政医師の可能性」	新潟県福祉保健部　松本　晴樹
「地域保健活動の実践～国際保健から国内地域保健まで」	熊本県菊池保健所　劔　陽子
「グローバルヘルスを志す人へ」	GHITファンド　國井　修

令和４年度
国立保健医療科学院 院外研修プログラム

日時：令和４年 11 月７日（月）９：30～17：00
場所：国立医薬品食品衛生研究所 殿町庁舎共用会議室
〒210-9501 神奈川県川崎市川崎区殿町 3－25－26
電話 044-270-6600(代)

第１部：09：30～12：15

1. 09:30－10:15　国立医薬品食品衛生研究所の紹介と新型コロナウィルス感染症に関するレギュラトリーサイエンスの取り組み
【本間副所長】

2. 10:25－11:10　医薬品の品質保証とジェネリック医薬品
【薬品部：伊豆津部長】

3. 11:20－12:15　ナビゲーション医療技術
【医療機器部：山本部長、植松主任研究官】

＜12:15－13:30　昼食休憩＞

第２部：13：30～17：00

4. 13:30－14:15　バイオ医薬品の品質評価
【生物薬品部：柴田室長】

5. 14:25－15:10　再生医療等製品の実用化のための課題と試験法開発
【再生・細胞医療製品部：安田室長】

6. 15:20－16:05　医薬品安全性情報の収集と提供
【医薬安全科学部：青木主任研究官】

7. 16:15—17:00　所内見学
【本間副所長】

添付資料３

2022年度　国立感染症研究所・医師卒後臨床研修プログラム

2022年11月8日（火）～11月10日（木）
講習時間　1コマ55分（講義45分＋質疑応答10分）
対象者：卒後2年目研修医（13名予定）

1日目（対面）

月日・場所	時間	内容	担当
11月8日（火） **午前** 国立感染症研究所 戸山庁舎 感染研第二会議室	10:20	開講	
	10:20～10:30	事務連絡（10 分）	
	10:30～10:40	開会挨拶（10 分）	所長 or 副所長
	10:40～10:55	国立感染症研究所の概要（15 分）	研究企画調整センター長 竹下　望（戸山）
	10:55～11:00	休憩(5 分間)	
	11:00～11:55	FETP の活動について（仮）	実地疫学研究センター長 砂川　富正（戸山・飯田橋）
昼食(65 分)			
11月8日（火） **午後** 国立感染症研究所 戸山庁舎 感染研第二会議室	13:00～13:55	感染症危機管理①（仮）	感染症危機管理研究センター長 齋藤　智也（戸山）
	13:55～14:00	休憩(5 分間)	
	14:00～14:55	感染症危機管理②（仮） （感染症危機管理研究センター（EOC）執務室見学含む）	感染症危機管理研究センター長 齋藤　智也（戸山）
	14:55～15:00	休憩(5 分間)	
	15:00～15:55	感染症危機管理③（仮）	感染症危機管理研究センター第一室長 吉見　逸郎（飯田橋）

2日目（対面）

月日・場所	時間	内容	担当
11月9日（水） **午前** 国立感染症研究所 戸山庁舎 感染研第二会議室	10:00～10:55	感染症の病理学（仮）	感染病理部長 鈴木　忠樹　（戸山）
	10:55～11:00	休憩(5 分間)	
	11:00～11:55	新型コロナウイルス感染症の疫学について（仮）	感染症疫学センター主任研究官 小林　祐介（飯田橋）
昼食(65 分間)			
11月9日（水） **午後** 国立感染症研究所 戸山庁舎 感染研第二会議室	13:00～13:55	動物由来感染症について（仮）	獣医科学部　主任研究官 松鵜　彩　（戸山）
	13:55～14:00	休憩(5 分間)	
	14:00～14:55	昆虫媒介感染症について（仮）	昆虫医科学部主任研究官 佐々木年則　（戸山）
	14:55～15:00	事務連絡(5 分間)	

3日目（対面）

月日・場所	時間	内容	担当
11月10日（木） **午前** 国立感染症研究所 ハンセン病研究センター 会議室	10:00～10:55	薬剤耐性菌について -院内感染症に関連する耐性菌- （仮）	薬剤耐性研究センター長 菅井　基行　（ハンセン）
	10:55～11:00	休憩(5 分間)	
	11:00～11:55	抗酸菌感染症の現状について（仮）	感染制御部第六室長 星野　仁彦　（ハンセン）
	11:55～12:00	事務連絡(5 分間)	
昼食・移動（80 分）			
11月10日（木） **午後** 国立ハンセン病資料館	13:10	集合　国立ハンセン病資料館	
	13:10～14:40	国立ハンセン病資料館見学	
	14:40	現地解散	

添付資料 4

2022 NIPH Japan
INFECTIOUS DISEASE CONTROL MODULE
November 14-18, 2022

SCHEDULE OF ACTIVITIES			
VENUE	**TIME**	**ACTIVITIES/ TOPICS**	**PERSON/S –IN-CHARGE**
Day 1: Nov. 14, 2022, Monday			
CPH Library Mezzanine	8:30 - 8:40	Opening Remarks	Dean Fernando B. Garcia, Jr.
	8:40 - 8:55	Introduction to the Course	Dr. Maria Margarita M. Lota
	8:55 – 9:10	Photo Opportunity	
	9:10 - 10:10	Neglected Tropical Diseases (Soil Transmitted Helminthiasis, Schistosomiasis) and Filariasis	Dr. Vicente Y. Belizario, Jr.
	10:10 - 10:30	BREAK	
	10:30 - 11:30	Malaria	Dr. Pilarita T. Rivera
	11:30 - 12:30	Dengue and Japanese Encephalitis	Dr. Maria Margarita M. Lota
	12:30 - 13:30	LUNCH BREAK	
	13:30 – 14:30	TB and MDRTB	Dr. Evalyn A. Roxas
	14:30 – 15:30	Measles and Polio	Dr. Maria Margarita M. Lota
Day 2: Nov. 15, 2022, Tuesday			
Room 102	9:00 – 10:00	Leptospirosis	Dr. Sharon Yvette Angelina M. Villanueva
	10:00 - 10:20	BREAK	
CPH Library Mezzanine	10:20 – 11:00	Rabies	Dr. Sheriah Laine De Paz-SIlava
	11:00 – 12:00	ERID (COVID19 and Monkeypox)	Dr. Evalyn A. Roxas
	12:00 - 13:30	LUNCH BREAK	
PGH	13:30 – 16:30	Visit to Philippine General Hospital	Dr. Evalyn A. Roxas Prof. Marohren Altura Ms. Micaella Dato
Day 3: Nov. 16, 2022, Wednesday			
WHO- WPRO Office	AM	Visit to World Health Organization-Western Pacific Regional Office	Prof. Geraldine B. Dayrit Ms. Loisse Loterio
		LUNCH BREAK	
CPH Library Mezzanine	13:30 - 14:30	The Philippine Public Health System; Health and Development	Dr. Susan Yanga - Mabunga
Rm 102	14:30 - 16:00	MOA Signing	Dr. Tomofumi Sone NIPH President Dr. Fernando B. Garcia, Jr, Dean UPCPH

Day 4: Nov. 17, 2022, Thursday			
	Whole day	Visit Provincial and Municipal Health Offices: Manganate Community (Cavite)	Dr. Sharon Yvette Angelina Villanueva Prof. Azita Racquel Lacuna
Day 5: Nov. 18, 2022, Friday			
RITM	AM	Visit to Research Institute for Tropical Medicine	Dr. Maria Margarita M. Lota Dr. Sharon Yvette Angelina M. Villanueva
		LUNCH BREAK	
CPH Library Mezzanine	PM	Closing Ceremonies Awarding of Certificates	DMM Faculty and REPS

Course Coordinator:
Dr. Maria Margarita M. Lota

Research Associate in charge:
Ms. Micaella C. Dato

DMM Faculty:
Prof. Marohren C. Tobias-Altura
Dr. Fresthel Monica M. Climacosa
Prof. Azita Racquel Lacuna
Prof. Geraldine B. Dayrit
Dr. Evalyn A. Roxas
Dr. Sheriah Laine De Paz-SIlava
Dr. Sharon Yvette Angelina M. Villanueva

Research Staff
Ms. Loisse Mikaela Loterio

添付資料５

令和４年度　専門課程Ⅲ　地域保健臨床研修専攻科
個人課題成果発表会　次第

令和４年11月29日(火)　10：00～16：00
4-8,4-9講義室　(Zoom中継あり)

プレゼンテーション10分、質疑応答10分を予定、課題名は変わる可能性あり

10：00　開始　諸連絡

10：05　①発達障害児に対する教育のあり方
10：25　②日本と諸外国の母子保健
10：45　③小児科入院における付添問題

11：05　休憩

11：10　④行動科学とソーシャルマーケティング
11：30　⑤健康に関する意思決定のための情報提供のあり方
11：50　⑥医療へのフリーアクセスの是非
12：10　⑦医療資源の配分に関する倫理的考察

12：30～13：20　昼休憩

13：20　⑧気候変動への取り組み
13：40　⑨センテナリアンの現状と Healthy Aging について
14：00　⑩医療情報におけるセキュリティについて
　　(Zero Trust Network という概念について)

14：20　休憩

14：25　⑪公衆衛生学と日本の高齢者医療の抱える問題点
14：45　⑫地域枠による医師確保対策について
15：05　⑬医師の偏在対策について

終了後　講評
16：00　終了

添付資料6　修了時アンケート抜粋

公衆衛生分野における医師の役割は、どのようなものだと感じましたか。（様々な職種が関わる中で「医師」のバックグランドを持つ者の役割とは、何でしょうか？）

- やはり医学への専門性、治療方針を決めるように、方針を決めるリーダーシップ能力
- そもそも公衆衛生は学際的な分野であり、多職種・多分野の協働が必要である。そこに医師として関わる以上、少なくとも臨床現場を知っているということが重要なコンピテンシーだと考える。
- やはり他の職種と違うのは、患者と面と向かって接しながら、違う頭で診断や治療を考える経験と思います。つまり、現場を経験しながら、同時に Public の事も考えられるという二面性だと思います。
- 医療現場と行政・社会をつなぐことだと思います。
- 医学的知識と現場での経験を活かして、行政や一般社会との情報共有をスムーズにし、日本の医療がより良いものになるように考えて行動することだと思います。
- 一つの分野に限らず様々な視点から物事を見ること、実際の現場で問題点を見出して政策づくりなどに生かすことで良い方向に変化を起こしていくこと
- 医療機関との交渉する上で医師の公衆衛生官だとやりやすくなると思いました.
- 医療現場や患者さんを通じた経験やエピソードを根拠を強めるものとして使って言えたり，制度を理解する例・頭の使い方であったりするのかなと思いました.
- 現場を知っている立場、使える専門知識をもっている立場として意見することができる。たくさんのステークホルダーがあるので、一つの分野の出身者として医師のバックグラウンドをもっている意義はあると思いました。
- 現場のニーズと行政をつなぐ架け橋
- 医学的知識を持ち、医師をはじめ様々な公衆衛生に関わる人達と話し合える。
- 医療的・科学的な正しい知識を持ち、「多くの人の健康な生活」を支えるために制度設計から運用まで様々な層に存在して連携する。
- 健康でありたい、健康にしたいと思っている非医療者の人にも適切な知識を提供したり、政策などの妥当性をフィードバックする。
- 医療現場の状況を知っている上で政策決定に関わるという意味で、政策が現場から乖離したものにならないようにするのが行政の中での役割と感じました。しかし関わる政策の内容によって、どの程度の臨床の知識や経験が求められるか、はかなり差があると思います。
- 公衆衛生分野では医師という公的資格を有すること自体が、経験の多少を問わずパワーバランスではリーダー的存在となるため、役職に関わらずリーダーシップを取る役割であると感じた。

- 医師の96%を占める臨床医を説得/納得/妥協させる必要がある公衆衛生理念的課題において、一丸となって対峙しなければならないとき、対等な交渉（戦い）をするにあたってグループ内に医師のバックグランドを持つ者がいないと交渉が困難となる or なりうると想定され、医師は交渉リーダーとして役割を担うべき存在であると思った。
- 医師としての臨床経験を経て得たミクロの視点と、公衆衛生行政に関わるものとしてのマクロの視点の両方を持つことができる。マクロの側で働くとしても、その制度や政策でどういった影響が出るのかをリアリティを持って想像し、フィードバックする。

研修を受ける前と受けた後で自分の中で変わったことはありますか。（今後のキャリアパスについて、公衆衛生の見方、医療政策の捉え方、など）

- 国際的な視点を持ったことがなかったが持てるようになった
- プロパーの医系技官やJPO経由のWHO職員など、学生が考える分かりやすい（派手な）公衆衛生キャリア以外に臨床と相互交流するような選択肢があることを学んだ（交流技官やWHO consultantなど）。
- より強く行政技官として働くことを指向した。
- 研修前には出会うことのできなかった、臨床とは違うフィールドでご活躍され、公衆衛生のキャリアを歩まれている方々のお話を伺えたことで、多様なキャリアパスについて考える機会となりました。研修前と比較して、公衆衛生分野のキャリアをより具体的にイメージできるようになりました。
- また、研修前に病院で臨床に従事する中では意識することのなかった日本の医療の問題点についても考える機会が多くあり、今後病院に戻った際に研修前とは違った視点から気づくことが多くあるのかなと思いました。
- 公衆衛生分野での働き方が国際機関、医系技官などの印象が強く、もう少し人と近い部分で関わりたいなと思っていたのですが、この 2 か月を通して公衆衛生には様々な関わり方があることを知って、将来携わりたいなという気持が強まりました。
- 医療行政・政策に関わってみないと公衆衛生は語れないなと思うようになりました.
- 厚労省で研修して、政策が成立されるまでの流れ、どのように・どのような人がかかわって政策ができているのか、ということがよくわかり、政策を自分事としてとらえられるようになりました。今後のキャリアパスに関しては、いろいろな立場、スケールの違い対象の違い、公衆衛生として関与できる分野などの明確化が研修前後で明らかに進んだので、現時点で興味があること、どのように携わりたいか考えが深まったように思います。
- ロールモデルとなる先生の講義が多くあり、公衆衛生で働くという未来についてより現実的に考えることができました。

- 公衆衛生分野についてより深く理解できたのと同時に、公衆衛生の幅広い活躍の場と、様々なキャリアパス・人生観・仕事観について知れたことはとても良かったです。
- 自分の身の回りがいかに公衆衛生によって守られた環境であるのかを、講義などを通して実感し感謝の念が湧きました。自分もそういった分野になんらかの形で携わるためには、公衆衛生分野の仕事で求められる要素のうち弱点となるマネジメント力や伝える力などの部分を補強しなくてはならないと感じました。
- 政策を練って形にする工程は思ったより生身の人が作っているのだと実感しました。
- これまでは厚労省や国際機関でのキャリアについてお話を聞く事が多く、あまり地方自治体について知りませんでした。今回の研修では地方自治体の実際の業務内容などについて学べた事で、公衆衛生の全体がより見通せるようになったと思います。
- 研修前は、レベルごと特に国～都道府県～地方自治体～各医療機関等コミュニティレベル、それぞれにおける公衆衛生医師の仕事の実際がよくわからずイメージが湧かない状態であり、また各レベルにおける自由度やレベル間の関係性や連携を促進・阻害する要因など常々疑問に思っていたことが、研修によってクリアになり、今後いつ・どこで・どのように・何を・誰を対象として自身のミッションを遂行していくべきかが具体的に見えてきた。
- 公衆衛生に関わるには、初期研修終了後すぐにフルコミットする必要があると思っていたが、キャリアチェンジであったり人事交流から足を踏み入れるなど、さまざまな入り口があることを学んだ。医療政策の捉え方としては、制度に対して「なぜその制度が作られたのか」や「どういう意図が隠されているのか」を考える視点を得ることができたと思う。

研修終了後の抱負を教えてください

- 社会に目を向けることを忘れないようにせず、社会全体を変えていけるような医師になりたいと思いました。
- まず、残りの初期研修期間と来年度以降の総合診療医研修を通じて、臨床医としての competency を高めたい（ひとつめの「専門性」を身につける）。特に医師 5 年目で離島勤務を経験し、プライマリケアについて何事かを語りうる立場になりたい。
- その後、現地での対人サービスに留まらず、国レベル、region レベルの保健に関わりたくなったら、厚労省の交流技官や MPH 取得の道を検討したい。
- 仮に大学での臨床研究畑に没頭したとしても、将来的には公衆衛生に還元する実務に就く道を常に探し続けたい。
- 病院では得られない経験を得られ、研修に参加したことは一生のためになると思います。将来どこかで科学院の先生方と一緒に仕事を出来ることを願ってキャリアを

積もうと思います。

- ご講義いただいた先生方が本当に多様なキャリアを歩まれていることが印象的でした。
- この研修で教えていただいたこと、考えたことを忘れずに、日本の医療、公衆衛生に貢献したいと思います。
- 研修医として臨床を行っている中でも、様々な視点から問題点を見つけ出して将来に生かせるようにしていきたい。
- 引き続き，パブリックヘルスマインドをもって取り組めることを見つけては関わり，いつか本格的にパブリックヘルスを仕事にしたいなと思います.
- 臨床の立ち位置や医療の立ち位置の理解が研修前後で深まったように思います。今回の研修を受けて公衆衛生、マクロな視点を持つことができたので、その視点を持ちながら課題を見つけていったり、その解決方法を考えながらひとまずは日々の臨床研修に取り組んでいきたいと思います。
- 臨床現場で経験を積みながら、国際協力や母子保健の普及など公衆衛生の分野でも社会貢献できるように精進していきます。
- 様々なことに興味・関心を持ち、目標に向かって挑戦していく。
- 麻酔科で専門医を取得しつつ、公衆衛生的観点を涵養し、自分の弱点を補強する。
- 研修の課題自体はそれほど大変でないはずだったのに、大学院出願と締切がほぼ同時で色々間に合いませんでした。行政で働いていても多くの仕事が一度に舞い込む事はあると思います…うまく仕切っていく能力を身に付けたいです…。
- まずは 4 月からの社会医学博士課程に、今回の研修で学んだ事を活かしながら今後も研鑽を積んで行きたいです。
- 下（コミュニテイ）から上（国）に声が届くような、100 年後を見据えた地域医療パイロットスタディ（具体的には漢方医学のアイデアを利用した在宅医療・保健）を、医師としての資格・背景を活かして多職種連携で構築する。(夢のまた夢だが、市長や県知事や政権が変わっても、引き継がれるシステムを考えながら)
- 実践における具体的アプローチ方法の習得の為、公衆衛生全般の知識と方法論を（残された時間を有効に使うため）オンライン MPH などで学習する。
- 未だに来年以降どこで働き、何をするのか決まっていない身ではあるが、いずれ公衆衛生に関わる仕事をしたいと感じた。
- 個人課題を進める上で問われた「それで何をするのか」「何が変わるのか」という、ただ物事を批評するだけではなく、実行するにはどうしたらいいか？という問いを常に持ち、少しでも前に進む方法を探そうとする姿勢を大切にしたいと思う。